第 155 号

館長だより

山形県産業科学館

令和７年１月１０日(金)

発行 館長　加 藤 智 一

朝方と夕方の鳥集会・ロースト

「今日も一日無事に終わった。」と、見上げる夕焼け空。オット何やら黒い無数の影。そう、カラスの大群が電線や建物の屋上に大集合。特に困るのが、信号待ちの交差点。何やら白い塊が眼前をかすめることもしばしば。実はこれ、「就塒前集合（しゅうじぜんしゅうごう)」と呼ばれる行動なのです。 カラスは夕方以降にねぐらへと帰るのですが、それぞれの個体が別々に帰るのではなく一旦ねぐら周辺の高いところ（ビルの屋上や電線など）に集まります。

ムクドリも繁殖期は巣で寝るのですが、ヒナが巣立つと親子ともに集まって群れを形成するようになり、夜は一か所に集まってねぐらを形成する習性があります。ねぐらには 10km 以上の範囲から集まり、冬は数万羽の大群となることもあります。かつては河原の広葉樹や人家の竹藪に集まっていましたが、現代ではそういった環境が減少したため、都市部の街路樹などにねぐらをとる例が増えてきました。鳴き声が「ギャーギャー」「ギュルギュル」とかなりの大音量で、時にはパチンコ店内の音量と同じレベルに達する場合もあるそうです。

都市部での彼らの行動は、大量の糞による汚染被害や、鳴き声による騒音被害を引き起こし、社会問題化しているところも全国に存在し、深刻な問題として議論されているようですが、決定的な解決策がないのが現状です。とは言え、根本的な原因は、我々人間の生活、そして都市開発にあるのでしょうから、彼らばかりを責めるのも申し訳ない気がします。鳥が朝と夕に集まる習性、その具体的な理由としては、

① 安全の確保: 朝と夕は捕食者の活動が活発な時間帯です。群れで集まることによって、自身が捕食されるリスクを分散させます。多くの目があれば、捕食者の存在をいち早く察知することができます。
② コミュニケーションと情報交換: 群れで集まることで、食べ物の場所や移動ルートなどの重要な情報を共有することができます。また、繁殖期にはパートナーを見つけるための機会も増えます。
③ 社会的行動: 鳥は社会的な生き物であり、群れでいることが安心感や快適さを与えることもあります。若鳥にとっては、群れの中で飛ぶ技術や生存のためのスキルを学ぶ機会でもあります。

このように、鳥が朝と夕に集まるのは、彼らの生存と繁栄を助けるための重要な習性なのです。ちなみに、これを「ロースト（roosting)」と呼びます。

廃鶏肉

「廃鶏肉」とは、１年～２年の排卵期間を終えて鶏舎から出される雌鶏の肉のことです。「廃鶏肉」は肉用鶏と比べて肉質が固いため、加工肉や冷凍肉、レトルト食品として利用されることが多かったのですが、近年ではブロイラー肉（若鶏肉）よりもうまみと歯ごたえがあると再評価されるようになり、「廃鶏肉」の活用を促し、「廃鶏肉」の価値向上とともに流通拡大を目指した取り組みが各地でおこなわれるようになりました。

みなさんは、「ひねポン」という料理をご存じでしょうか。ひね鳥の肉を炙ってポン酢を加えて作る料理です。「ひねポン」は、関西の西側、播州の名物料理として知られています。播州では鶏卵を得ることなどを目的として養鶏が盛んに行われてきました。しかし年老いて卵を産まなくなったひね鶏は、通常の食肉として出荷される鶏肉用の若いニワトリよりも肉質が硬い。しかしそのような肉質ではあっても炙ってポン酢で和えてみたところ独特の旨味があったため、「ひねポン」を播州姫路の名物として、今では主に居酒屋などで提供されています。

また、和歌山県橋本市の橋本商工会議所では、ひね鳥を食材にした新ブランド開発に乗り出し、キャラクター「ひねキング」と、その着ぐるみを制作し、地域の特産品として売り出されています。ホントかどうか知りませんが、フランスの肉屋さんでは、焼いて食べるなら若鶏肉「プーサン」、シチューなら廃鶏肉「プール」。こんな感じで使い分けているそうです。皆さんのご家庭でも、ひね鳥のご活用を検討してみてはいかがでしょうか。私は、姫路の居酒屋さんで、実際に「ひねポン」を食べたのですが、食感と味わいは癖になりますよ。日本酒で乾杯。